

30号 平成19(2007)年5月15日

都合の悪いこと、ひとに知られたくないことを、隠そうとする気持ちは誰しものこと。でも、人の命にかかわる安全上の欠陥を隠しとおそうとするなんて、許されることではありません。JR西日本は、4月に開所した社員研修施設の展示内容のうち、信楽鉄道事故について、事故原因となった「方向優先てこ」をJR西が独断で設置したことについて、何の記述もなく、信楽鉄道の抗議を受けても展示を書き直すことすらしません。4面に信楽事故遺族のコメントを掲載していますが、それにしても、正しくないことを教えるのが社員研修だなんて！ JR西には、もっとほかにも隠し事いっぱいあるのかも？と思われてもしかたないでしょう。

事故から2年を経過して

これ以上被害を拡大させない

4・25ネットワークでは、事故から2年目にあたる4月25日、尼崎市のアルカイクホール・オクトで、「追悼と安全のつどい2007」を開き、約400人の聴衆のもと、15人の遺族・負傷者がそれぞれの心境を自らの言葉で語りました。

遺族・負傷者の、つらいなかでも前を向いて歩いていきたい、事故を現実のものとして受け止めていきたいという切実な思いが伝わり、被害者・沿線住民とも、胸を打たれる内容の感動的な「つどい」となりました。

事故から2年が経過し、加害者の役員構成も様変わりし、当時のことを知る役員は関連会社に天下って遺族の前にすら出てこようとしません。

なによりも当初からの「なぜ私たちの肉親は死ななければならなかったの？」という問い掛けへの答すらありません。

JR西日本は、同社の事故以来の対応への不信・疑問が、被害者をさらに傷つけ、被害を拡大していることに早く気づき、反省し、態度を改めるべきではないでしょうか。

これ以上被害を拡大させることは、なんとしても食い止めなければなりません。

5月例会のご案内

2007年5月20日(日) 13時開場

13時15分開始 16時30分終了

場所「宝塚ソリオ2」4階

0797-86-4006 阪急宝塚駅すぐ

例会終了後に、弁護士・税理士・司法書士・カウンセラーに個別の相談もできます。

小さなお子さんたちの保育室を設置し、ボランティアの方が例会中の保育を担当します。子どもさんをお連れの方は、なるべく事前に事務局までご連絡ください。

今後の予定

6月例会は6月17日、7月は15日、場所はいつもの宝塚「ソリオ2」です。

分科会は

6月3日(日)13:00~「被害対応」

同日 15:00~「人事問題」

サンビオラ一番館3F

宝塚国際文化センター会議室

6月9日(土)13:00~「説明責任」

三田駅前キッピーモール6F

「思いを語る会」は

6月9日(土)13:00~ いたみホール

追悼と安全のつどい 2007 の 講演内容

郷原信郎先生 (桐蔭横浜法科大学院教授・ 元検事、弁護士)の講演から

- ・「法令の遵守(つべこべ言わずに守るニュアンス)」が弊害になることが多い。
- ・人の注意力には限界がある。「法令の遵守」を重視し、枝葉末節的な事柄ばかりを気にする余り、肝心なことがおざなりになってしまう。
- ・今回の事故も、以下の3点において同様のケースが考えられる。
 - 急カーブでの異常なスピード
 - ...「運転時間厳守」のプレッシャー
 - 乗り合わせた社員が救助活動をせず出勤...「勤務時間厳守」のプレッシャー
 - 安否を気遣う家族への安否情報の影響を拒否...「個人情報保護法」遵守に固執
- ・今の日本は重大事故の刑事責任追及において被害者や遺族の心を満足させるものになっておらず、刑事捜査のシステムも肝心の被害者や遺族が「蚊帳の外」に置かれてしまうものになっている。
- ・被害者や遺族は「事故を沈静化させて欲しい」とは思っていない。「事故による犠牲を生かして欲しい」と思っている。今回の事故調の動きは、事故の原因と真相の究明のあり方をこれまでの司法(捜査)主体から事故調(調査)主体にしようとするもので、意義あることである。

黒田 勲 先生 (日本ヒューマンファクター 研究所所長) の講演から

- ・今の日本社会は大きな曲がり角に差し掛かりつつある。
- ・安全への施策についても、これまでの「後始末型」(後ろ向き)から「予防型」(前向き)への発想の転換が求められている。
- ・安全文化の構築のために必要なことは以下の4点である。
 - 責任関与...明確な安全理念、リーダーの率先垂範
 - 相互理解...現場との対話、現場の意見の取り入れ
 - 危険認識...幅広く危険を予測し、迅速に事前対応
 - 動機付け...現場力の自発的な盛り上がり

【閉会の挨拶から】

- ・今回発表していただいた方は悲しみを抑えながらの勇気ある発表であり、敬意を表したい。
- ・最近の JR 西の対応をみても、今朝の社長の挨拶にしても、冷静で、ひびかない挨拶だった。その点は、今日の発表からもわかるように被害者の声とは非常にギャップがある。
- ・被害者だけでは荷が重いので広く社会に訴えようと思い、このような「つどい」を開いた。できるだけ多くの人に聞いてほしい。後押しがほしい。
- ・目的はただ、JR 西に安全を取り戻したいだけだ。この現実を JR 西の幹部はまだわかっていない。
- ・「被害者」は遺族や怪我をされた方だけではない。この事故で家庭が崩壊した人などもすべて含めるべきで、この点は改めて考えないといけない。

- ・事故後より、JR 西は「100%JR 西に責任がある」「誠心誠意」という言葉を使ってきたが、最近はやたら「精一杯」という言葉に言い換えている。「精一杯」は「自分たちのできる範囲でします」という意味である。「誠心誠意」は加害者と被害者との間に信頼があってこそ成り立つが、「精一杯」は加害者が自分の理屈の中で自己弁護の言葉として使っているだけだ。これは単なる言葉の言い換えなどではなく、根本的な路線の変更である。このように言葉がコロコロ変わると不信が広がる。新聞などによく出ている言葉だが、溝が深まるだけだ。

第7回 ささえあい JR 西の対応を考える分科会（被害対応の分科会）の報告

抗議書（3月28日、JR 西に対して提出）の回答について

- ・JR 西の回答は、「そういうことがあったとすれば、ご心情を害されたのであれば申し訳ない」というように一応お詫びしているが、法的には問題ないといわんばかりできわめて不誠実な回答である。
- ・反社会的で権利侵害している。
- ・健康保険の直接損害と間接損害の考え方、それに基づく健康保険組合への求償について明らかに間違っている部分について再抗議しても良いのではないか。そもそも JR 西日本の幹部たちは遺族の皮肉やいやみの混じった言葉を理解できないところがあり、自分に親しみを持ってくれた、気持ちを許されたと勘違いし自分たちの立場をわきまえずにいるのである。傷ついたことを JR 西日本に言い続けると彼らには通じない（欠落してい

る）。

- ・この感覚的なズレが JR 西日本の組織を代表しているようなものである。
- ・開き直りとも思える元会長の態度が解決を一層困難にしている（4月4日の弥生会館での態度を見ればあきらかである）。感情論でなく具体的な証拠を突きつけないと変わらないのでは？
- ・JR 西日本は遺族に対して 100%悪いと認めているが、事故調に対しては会社として悪くないと発言している。社員が起こした事故なので責任を取るが、本音として会社としては悪くないと思っている。いかにして、JR 西日本の会社としての責任の意識を引き上げるか、が課題である。
- ・「再抗議書」を世話人会、例会で煮詰めて作成する。

慰霊式、追悼と安全のつどいについて

- ・JR 西の慰霊式の時、社長はあのような神聖な場所で2度もお茶を運ばせて飲んだ。抗議すると前日に熱が出たので、おわびの言葉を述べる時に喉がおかしくなるとはいけなからとのことだった。それならあのような場所でなく陰で飲めばよいものを、小さな子どもが我慢しているのに社長ならもっと我慢すべきである。
- ・午後の「つどい 2007」では、朝が早いせいか、皆疲れている様子だった。
- ・日にちを変えることはできないものか。たとえば1週間後とか。ただ JR 西日本に1日会場を借りているという名目がなくなるので、費用を負担させるのがむずかしくなる？
- ・25日を過ぎるとマスコミ報道がパタッと

なくなる。本来なら、これをきっかけに盛り上がって欲しいのだが…。

今回、話し合いの結果、分科会（旧・二次被害）の名称を変更いたしました。参加者全員が練りに練って考えましたが、少し長いので副題として「被害対応の分科会」としました。次回は、

日 時：6月3日（日）13:00～15:00

開催場所：宝塚国際文化センター会議室1
神戸赤十字病院心療内科 村上典子医師が来てくださいます。

（NHKテレビの報道でトリアージの重要性を話された医師です。）

都合の悪いことを隠すとは…

考動館での信楽事故の展示内容は問題

吹田市にできた社員研修施設「鉄道安全考動館」の展示の中で、信楽高原鉄道事故（1991年5月、死者42人、負傷者600人以上）の説明が不適切だと、信楽高原鉄道はJR西に対して抗議を行いました。

信楽高原鉄道の事故では、JR西が信楽高原鉄道側の線路の信号を自社の都合で操作できる「方向優先てこ」を信楽高原鉄道に無断で設置しました。そしてこの「方向優先てこ」が、信楽駅の出発信号が赤信号のまま変わらなかったことの原因のひとつとなり、あってはならない単線上の正面衝突事故につながっていきました。

しかしJR西は大阪高裁で敗訴するまでの12年間、この「方向優先てこ」が事故の原因であることを否定し続け、そしていまだに「JR西の過失割合は少なかった」と、賠償金支払いの割合を信楽鉄道と争っています。

今回の考動館のパネルを見ると、やはり「方

向優先てこ」の記述がありません。JR西日本は、社員教育といいながら、自分に都合の悪い「方向優先てこ」には触れずにすまそうとしているのです。

信楽事故で妻を奪われた吉崎さんは、「JR西の体質は変わっていない。なんら教訓を学んでいない。事故直後からJR西は自らの責任を認め、対策を講じておけば、次の大事故は起きなかった。遺族と社会に対し、JR西は12年も真実を隠し続けた。そのため、安全第一の企業風土も育たなかった。福知山線事故の原点は信楽にある」と語っています。

「再抗議書」をJR西に提出します

3月28日、JR西日本に対し「抗議並びに釈明要求書」を提出し、4月11日、これに対する「ご回答」という文書を受け取りましたが、すべての項目について納得できる回答はなく、「再抗議書」を作成し、JR西日本に提出します。これについては分科会報告に記載しましたし、これらの文書および下記の「声明」は、ホームページに掲出しています。

「事故2年にあたっての声明」を発表

事故から2年を経過した4月24日、4・25ネットワーク世話人会として声明文を発表し、「JR西日本は当事者責任を認識し、事故原因を検証して社会に説明責任を果たすべきである」「遺族・負傷者の心身回復と生活再建に対応すべきである」「国交省、事故調への要望」など5項目にわたり、ひるく社会に訴えました。

『思いを語る会』

5月13日の『思いを語る会』は、世話係を引き受けていたTさんの病欠欠席もあり、参加者は5人でした。

次回は **6月9日(土)午後1時～**

場所は、**いたみホール** 3F 小和室です。

電話 0727-78-8788

皆様のご参加をお待ちしています。